

# 戦国†恋姫 if 井伊討鬼絵巻

通りすがりのガンダムユーザー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世は乱世の時代。後に戦国時代と言われた時代。  
その世に2つの『鬼』が一石として投げ込まれた。  
波紋を浮かべ、時に荒波ともなる原因。

しかし、それは『天人』の招来に比べれば些細なことである。だが、  
積み上げられた物語はどう転ぶか  
それは誰にもわからない

### ※注意事項

これはリハビリとして投稿しています。ですのでスランプ状態などからの投稿だと思ってくれたら幸いです。

基本的にR15版準拠です。Xはついてませんので悪しからず。  
Ifです。色々とifです。例えば?……主人公は既に成長した  
井伊直政です。

主人公の御家流は他作品をイメージします。

目

次

序章 《客將》

第一章

第一節 《仕合》

第二節 《劍丞隊》

11 5

1

## 序章 《客将》

「僕が客将ですか？」

とある城内の一室にて二人の人間が向き合つて話をしていた。

「ええ。鴻矢、あなたに足りないものは何かわかりますか？」

「第一に経験だと思います。その次に智略や軍略といったものかと」

「そう。あなたはまだ元服してあまり月日が経っていない。三河の武士としては強い部類に入るあなたでも経験が少なければ足元を掬われることもあるでしょう」

「経験を積むという意味でも三河以外の国を見て学んでこい……ということでしょうか？」

「そうよ。私は鴻矢に今後の松平家を支える武士として早く一人前になつてもらいたいのです」

「わかりました。期間は……」

「鴻矢の自信がつくまで」

「そんな不確定なものでいいのですか？」

「あなたは私を裏切らない。そう信じているの。久遠姉様の元でよく学びよく励みなさい。井伊万千代直政」

「わかりました葵様。それでは早速支度に向かいたいと思います」

井伊直政と呼ばれた人間は一礼しその場をあとにした。

「励みなさい。あなたにはそうすべき才があるのよ」

※※※

僕の名前は井伊万千代直政。通称は鴻矢。

井伊の長男として生を受けたが僕が数え年で二歳の頃に父上が討死。叔父上は先の田楽狭間の戦いでお亡くなりになられた。まあ、僕はというと叔母上のお考へで葵様の旗本についたので井伊の血を残すことには成功してますが……叔父上が死んでから三日後のことでした。

葵様の命により僕は尾張へ客将として向かうことになつたのですが……

「何をすればいいのか……」

葵様に言われてから二日後、馬の上でゆられながらそんなことを考えていました。

そもそも僕はやつと数年前に小性から武将になつたばかりの若輩者。

それに織田殿は田楽狭間に舞い降りた天人という存在を保護したらしい。田楽狭間の天人はまさに仮の使いのような光と共に現れたらしいですが……まあ、綾那さんの言うことなんで話半分に聞くに限りますね。

そもそも、葵様は僕を尾張に向かわしたのも解せない。

葵様に歯向かうつもりは元よりないけどそれにしたつていきなりだ。

葵様の目指す天下においては織田様もいざれ敵になるはず。……織田殿を倒す前に甲斐の虎や越後の龍を倒す必要があるとは思いますがそれはさておき、そんな関係性のところに僕に向かわせるのは経験を積ませること以外になにか考えがあると思いますが……

「まあ、そんなに色々考えてるとすぐにつきますよね……もう尾張だ……お腹痛い……」

うわつもう着いやつた……やだなあ……

そう考える僕の頭と違ひ体はどんどん動いていく。

門番に要件を伝え大広間に通された。

誰もいない広間の中心でじつと城主である織田殿を待つ。

……それにしても周りの気配がなんというか……ガヤガヤしてゐる？

僕に対して敵意を放つてゐるものもいれば、気配が乱れているもの、品定めをしようとするもの。色々感じれる。

その直後に部屋の襖が開かれた。

暗い赤の髪を持つ女性……恐らくは柴田殿だろう。チラリと一瞥するだけでもどれほどの強者かわかる。

「……織田久遠信長様のお入りである！頭を下げよ！」

「……」

僕は黙つて頭を下げることにした。

何者かが僕の前に座つた。

「頭を上げよ。お前のことは葵から聞いている。待たせたな井伊の」「はっ！」

僕は織田様であろう人の言葉通りに頭をあげた。

「文にも書いてあつた通りの奴だ。自己紹介をしてもらいたいのだが

「僕の名前は井伊万千代直政と言います。我が君主、松平葵元康様の命で織田殿に協力するよう言わされました。なにとぞ、よろしくお頼み申し上げます」

「まあ、そんなものでよからう。知つておるであろうが我が織田久遠信長だ。今川治部大輔との戦いを終えたばかりとはいえこのようないくつかの対応になつてすまない」

「い、いえ！僕のような若輩者が織田殿と直接会うこと自体が烏滸がましいのです！そのような自分にはお言葉もつたいない！」

「……葵の文にあつたようにへりくだつたやつだな。それはそうと井伊の」

「鴻矢……でお願いします。未だ僕には井伊の名前を背負えるほどの強さは持ち合わせしておりませぬので……」

「ふむ、ならば鴻矢。お前は織田の客将として協力してもらうこととする。城のことはその壬月や手の空いているものに聞いてくれ、近々戦になるだろう、存分に働いてもらうぞ」

「はっ！」

※※※

それから三日後、僕は織田殿に呼ばれて評定の間にいた。

「やーおはよー鴻矢くん」

「雛さん、おはようございます。犬子さんと和奏さんは……」

「すぐに来ると思うよー」

雛さんの言う通りすぐに織田の三若である犬子さんと和奏さんが現れた。

「よう鴻矢！」

「おはよう鴻矢くん！」

「おはようござります。和奏さん犬子さん」

軽く挨拶を交わすとお二人は自分の定位置についた。僕の場所は雛さんの右隣だ。

「全員揃つたな。麦穂、奴を呼んできてくれ」

「はっ！」

麦穂さんが評定の間から一旦立ち去る。

ほんの少し時間がたち麦穂さんが今一度襖を開けた。

(あれが田楽狭間の天人……普通の人見えるな)

この場にいるほとんどが田楽狭間の天人を見つめる。好意的にはどう見ても見えない。

かくいう僕も品定めをする様に注視している。

「どうした剣丞。そんなところに突つ立つておらず、こちらに来い」

久遠様は自分の横スペースをポンポンと叩いている。……笑いを堪えてる表情だ。

「失礼します。……」

田楽狭間の天人が腰を下ろした。

「皆の者。こやつが我の夫となる男、新田剣丞だ。存分に引き回してやつてくれ。ほれ、貴様も何か言え」

「何かつて何を？」

「自己紹介ぐらい自分でしろと言つている」

「あ、ああ自己紹介ね……」

コホンと一息つき田楽狭間の天人は口を開いた。

「えー……新田剣丞です。天から落ちてきて久遠……こちらにいらつしやる織田三郎久遠さんに保護されました。何の因果か、久遠さんの夫になることが決まりましたので、皆様、今後とも、どうぞよろしくお願ひしまーー」

「ふざけるなあああ————!!」

和奏さんうるさいです。まあ、想像に容易かつたけど。

# 第一章

## 第一節 《仕合》

「例え殿がお認めになつてもボクは認めないぞ！」

天人の夫発言にいきりたつ和奏さん。うるさいので遠慮してもらいたいのだが……

「控えよ、和奏。御前であるぞ」

壬月さんがすぐに窘めるしいつかな。

それで下がる和奏さんじやないつてことも知つてゐるけどね。

「でも壬月さま！ いきなり出てきたこんな奴が、殿の夫とかつて、どう考へても！」

「その件については後にしろ」

「むー……」

「まあ確かに佐々殿の意見も分かりますよー。雛もそう思ひますしー」

「佐々殿。滝川殿の意見に犬子、じやなかつた、前田又左衛門わんこ犬子まえだまたざえもんも同意見だよ！」

そんな和奏さんに同調するよう雛さん、犬子さんが立ち上がつた。ただ……犬子さん無理にしなくともいいと思ひますよ。

「犬子ちゃん、無理して言葉遣いを改めなくとも良いですかね？」

「えへへ、ごめんなさーい」

うん、やっぱり犬子さんはこつちだね。

「という訳で、我ら三若は反対の立場つてことでー」

「そうそう！ やっぱ雛も犬子も分かつてゐるなー。さすが相棒だ！」

「まあ、久遠さまがお決めになつたことだから、認めるしか無いんじゃなあかなーって雛は思つてるけどね」

軽い……雛さん、それは流石に軽いですよ。

「何軽く言つてんだよ雛あ！ 久遠さまの夫と言えば、政戦領略で尾張にとつて重要な位置にあたるんだぞ！ それをどこの馬の骨とも分からぬ奴が、いきなり出てきて夫になるとか、そんなの認められる

かー！」

「そうだーそうだー！」

「……というのが家中の意見ですが」

「せつかくだからな。鴻矢、お前はどう思う？」

「へ？」

……客将である僕にそれって聞いていいことなんですか？

「……僕が口出ししていい事じやないと存りますが」

「いいではないか」

「……僕は反対です。織田殿は織田殿で考えがあるとは存じますが、それでもそのような何も分からずの男を家臣ならまだしも夫にするのは反対ですね」

少し考えて僕の意見を言つた。僕としては至極妥当の意見を述べたつもりだ。

「ふむ、まあそなうなるだろうとは思つていたが。……おい和奏」「はい！」

「どうすればこやつを認める？」

「ボクより強ければ認めてやります！」

即答……でも三河では見慣れた光景ですね。小競り合いの決着はいつも「強い方のいうことを聞けばいい！」とかで……

「え。結局それなの、和奏あ～……」

「まあ和奏だし」

僕の頭の中で和奏さんは綾那さんと同じ括りにしておこう。

「強ければ、か……ならば簡単だな。剣丞、和奏と立ち合え」

「……」

天人が「えっ」つて顔をしてる。

「どうした？やらんのか？」

そこで織田殿と天人はなにやら内緒話を始めた。

(鴻矢くん鴻矢くん)

そんな二人に悟られないように雛さんがコソコソと話しかけてきた。

(あの剣丞って人のことどう思う?)

(……あつてまだほんの少しですが……そうですね。あの服装から見るにどこかの国で裕福な暮らしをしていた……と見ていいでしょ  
うね。それにしては体が引き締まっていますが……異邦人という可能  
性もあると思いますよ)

(やつぱりそんな感じか)

(やつぱりとは雛さんもそう思つたんですか?)

(滝川衆の頭領として一応ね)

そこで天人と織田殿の内緒話が終わつたのでこちらも話を切り上げた。

「はあ～……分かつた。精一杯やつてみるよ」

どうやら天人は織田殿に説得されていましたね。

まあ、ご愁傷様です。三河武士とまでは行かなくとも織田家中の人たちつて結構血の気が多い人がいるので……特に森一家。まだ会つたことはありませんが、血の気の多さでいうと三河武士を超えるとか。いやー、比較された三河武士によりますがあんまり関わり合いにはなりたくないですね。

「……あのー、ここじや狭いと思うんだけど

「なら庭でやりやいいだろ!」

「いや、庭も広いんだけど、障害物が多くすぎて、戦いづらいというか

……」

「文句の多い天人様ですね」

「そうだそうだ! もつと言つてやれ鴻矢!」

「や、さすがにそれはどうかと思いますが」

「ならば我の屋敷の庭にすれば良い。……ああ、この際だ。他に立ち合いたい奴が居れば進み出よ」

そこで各々に皆さんが声を上げ始めた。

壬月さんを始め、犬子さん、雛さん、あげくに麦穂さんまで参加すると言ひ始めた。

「じゃあ、折角なので僕も。僕がどれほどの武士なのか示すいい機会ですし」

まあ、僕は尾張に来てからずつと城内の散策や兵法書などを読んで

いたので仕合とかしてなかつたから好都合という面もありますが。

「麦穂に鴻矢もか？」

織田殿が少し笑いながらそう言う。

「私は剣丞どののことを認めておりますが、武士として一度お手合わせ願いたく……」

「僕は先程申し上げた通りです。それに田楽狭間の天人がいかよな力を持つているか気になりますし」

「ふむ。良い。許す」

「ちよつと久遠さん……？そんな簡単に許されても、実際にやるのは俺なんだけど？」

「なあにたかが六人だ。何とかせい」

「はあ……まあ頑張るけどさあ……」

「まあ、その中には三河の赤鬼が混じっているがな」

「赤鬼!?」

「字名ですよ。僕はそんな仰々しい存在じやありません」

※※※

とにかく結果だけで言おう。

三若の皆さんは天人に負けました。

雛さんに至つては御家流使つて負けてましたけどね……

「次は……そうだな。そろそろ嚆矢、お前が行け」

「わかりました」

僕はひよ子さんから刀を受け取り土を踏む。

「刀で良いのか？」

「槍を使うと勝つのが目に見えますので。それに一対一なら刀の方が良いかと」

軽くその場で飛び跳ね具合を確かめる。

……行ける。御家流を使つても大丈夫そうだ。

「次は君?」

「ええ、そうです。僕は井伊万千代直政、通称は鴻矢。松平葵元康様の配下ですが、今は経験を積むために客将としてここにいます。折角なので僕がなぜ『三河の赤鬼』と呼ばれているかご覧にいれましょう」

呼吸を整え体に氣を纏わせる。

僕が作り上げた御家流『赤迅踏破』

呼吸と空氣中の氣の両方を操り体内にある氣を活性化させ一時的に神速の如き速さを得る。この際に体に纏つた氣が赤く発光し僕の纏う藍色の甲冑が赤く見えることから赤鬼と呼ばれ始めるようになった。

井伊家の御家流は一対多を想定しているので、僕は一対一でも燃費のいいものを作り上げたかった。

それできました御家流。

「それでは……行きますよ」

「な！」

素早く踏み込み一步で加速し、刀を抜き払う。

天人はそれを何とか刀でそらした。

「早い……それも御家流？」

「ええ。一応は。僕が編み出した御家流で『赤迅踏破』せきじんとうはと名付けました。先程の雛さんのとは違い見えなくなっている訳では無いので目で追おうと思えば追えますよ。まあ、それでも振り切つて見せます……が！」

「ぐつ！」

キン！

刀と刀が小さく音を鳴らす。

雛さんの時は殺氣を感じて避けたようですが、僕の赤迅踏破は殺氣よりもなによりも早く駆ける御家流。

今は対応出来てもその程度では……

「では、そろそろ準備運動は終わりですかね。体が温まつてきました」「準備運動……嘘だろ……」

「嘘ではありません」

その証拠に僕の速度は先程より格段に上がっている。

「くつ……」

息付く暇を与えず攻め立てる。この速度でもまだいなしますか……なら

「どうした？息が上がったのか？」

僕は加速をやめ赤迅踏破を解除する。

「参った！」

「なつ……あのままいつたら勝てただろ！」

「確かに勝てましたが……それでは剣丞さんを殺してしまいそうになるので……今回は仕合であるが故に勝ちを譲りました。これが死合なら僕の勝ちでしたね」

「ほう……貴様なら剣丞の首を取ると思つたのだがな」「首を!?」

「さすがにそこまではしませんよ。それに剣丞さんの技量を見極めるというのであれば殺す必要とありません」

僕はそう言うと元いた場所に戻つた。

僕の後は麦穂さん、壬月さんの順で剣丞さんと戦つていた。

麦穂さんとの仕合は……うん。卑怯な手を使つていたとだけ言っておきます。

壬月さんは五臓六腑を使い剣丞さんを文字通り吹き飛ばした。

いやー圧巻でしたね。剣丞さんが五臓六腑を食らつてもご自身の命の別状がないどころか五体満足でいるなんて。

これは認めるしかないですね。

いや、まあ、手合わせはその場の雰囲気に飲まれた行つた節はあります。あの速さを現段階でいなせるなら相当筋がいいと思います。

「鴻矢も良いな？」

「そもそも僕は織田様の家臣ではないので意見するのも何か違うと思いますが。まあ、いいと思いますよ。織田様の夫になる人でなければ三河に連れ帰りたいところです」

「そうか……鴻矢、剣丞の元で学ぶ気はないか？」

「……はい？」

## 第二節 《剣丞隊》

「剣丞さんのところで学ぶ……とは？」

「言葉通りだ。すでに嚆矢は様々なものを身につけている。今後、剣丞には隊をつけようと思つてな。その補佐と剣丞の元で今よりも多くのものを学がよい」

「……わかりました」

「しかし、鴻矢だけでは不安ではあるな……  
「僕はまだまだ学ぶ身ですので……」

そこでひよ子さんが織田殿に報告に来た。

「殿おー！たつた今、佐久間様の部隊が墨俣よりご帰還されました！」

「デアルカ。……おい猿！」

「は、はひつ！」

「貴様もそろそろ武士として名乗りをあげても良い頃合いであろう。  
剣丞の下に付き、功をあげよ」

「えつ!?」

「小人頭を免じ、今日よりは武士となれ！」

「あ、ありがとうございます！」

「鴻矢と共に剣丞隊第一号、第二号として励むが良い。まずは剣丞を  
介抱せい。目覚め次第、三人で城に来い。沙汰を与える」

なにかトントン拍子で話が進む……まあ、良いのですが。

「これにて剣丞の検分を終える！皆は評定の間に場を移し、墨俣より  
報せを聞け」

「「御意！」」

※※※

あの後、僕は剣丞さんを担ぎ上げ

織田殿の屋敷の一室に運ぶ。そこはすでに布団が敷かれていたので剣丞さんを寝かした。

「鴻矢様は……」

「呼び捨てでいいですよ。今日から同僚ですし、敬語もなく構いま

せん

「えと……鴻矢くんは剣丞さまの下につくことに反感とかないの？」

ひよ子さんは僕にそう問い合わせた。

「僕は学ぶためにここにいるので……それに織田殿には僕には見えてないものを見るために剣丞さんのところにつけさしたと思します。ま、どこにいても励むことに変わりはありませんけどね」

僕はそう言いながら剣丞さんが眠る布団の横に座る。

刀を横に置き、いつ目覚めてもいいように待つ。

「ほら、ひよ子さんも座つて。剣丞さんが起きるのを待つとしませんか？」

「私も呼び捨てでいいよ。丁寧な言葉も使わなくともいいよ」

「いえ、僕のコレは癖なので。多分、相手が親の仇とかでもこの口調は変わりませんよ。……でも、まあ……今からひよさんと呼ばせてもらいます」

※※※

s a i d 剣丞

「う、んん……」

唐突に目が覚める。パチッと目を開けると、そこは比較的に見慣れた久遠の屋敷の天井があつた。

「うう、まだ身体のあちこちが痛えよ……」

そう毒づきながら体を起こす。

「ええと……どうなつたんだっけ?」

「剣丞さんは麦穂さんのあとに壬月さんと対峙し、壬月さんのお家流を防御したもののお家流で起された爆風で吹き飛ばされ気を失い、現在に至ります」

「わっ!び、びっくりした……」

俺のつぶやきに対してひとつの中がそう答える。

声の方を見ると二人の少女が布団の横に座っていた。

一人はさつき手合させをした鴻矢さん……だっけ?

「先ほどぶりです、剣丞さん。改めて自己紹介です。僕は井伊万千代鴻矢直政、鴻矢とお呼びください。織田殿の提案により貴方様の下に

つくことになりました。以後、よろしくお願ひします。それでこちらの方は……」

「木下藤吉郎ひよ子秀吉と言います！お殿様より剣丞さまのお世話を命じられました！今後ともよろしくお願ひします！」

「あ、えーっと……よろしく？」

木下藤吉郎つて豊臣秀吉の昔の名前じゃなかつたか？

猿と呼ばれ、織田家中で頭角を現し、最後には天下をとつた戦国隨一の出世人……

それに井伊直政といえど、徳川三傑に数えられる武将で後々には徳川家中の中では当主一門を除いて一番広い領地を与えられたとか。

その二人の武将が、この女の子たち……つてにんしきであつてるんだろうか？

「それで、ええと……鴻矢さんと木下さんだつけ？」

「はい。けれど、呼び捨てで構いません。剣丞さんは僕たちの主になりますので」

「私もひよと呼び捨てになさつてください！」

「その主つてのも良く分からないんだけど、ええと……お世話つていのものどういうこと？」

「それは……」

「すみません、実はまだお殿様より何も聞いてなくて……」

「聞いてない？」

「ええ、織田殿は僕には剣丞さんの元で学べとしか……」

「私の方は、ただ剣丞さまのお世話をしろ、としか言われてませんね……」

「ふむ……」

「あ、でもでも！お掃除は得意です！料理はあまりとくいじやないけど！だから剣丞さまの家事のお世話は、料理以外はできますよ！」

「おっ、それはちょっと嬉しいかも」

「僕は……家事は得意ではありませんが、剣丞さんの身辺警護ならできること。僕の強さは剣丞さんはすでに知っていますよね？」

「たしかに……頼もしい限りだね」

言いながら久遠の意図を推測する。

多分、久遠が気をつかつて、この世界のことが分からぬ俺にしてくれた、文字通りの世話人ということかな？

……でも、嚆矢には何を学ばせる気なんだろ

「了解したよ。右も左も分からぬ若輩者で、迷惑を掛けられるけれど……頼りにします」

そう言いながら俺は二人に對して頭を下げた。

「…………はい？」

そんな俺に對して嚆矢はあつけに取られたような声を出し、ひよは驚きの声をあげた。

「そ、そんな滅相も無い！頭なんて下げないでくださいよおおお！」  
「…………流石にこの程度のことでの頭を下げられてはどう反応していいものか……天人だからですか？」

二人は口々に自分の意見を言つた。

ひよはおそれおおいと言わんばかりに声を上げ、嚆矢は呆れたように右手で自分の目元を覆つた。

「あら、やつと起きたの？」

そこで帰蝶が部屋に入つてきた。

「やつとね。……あ、お茶持つて来てくれたんだ。ありがとう」

帰蝶がスッと差し出してくれたお茶をする。

「はあ～……生き返る」

「壬月に負けたのに、呑気なものね」

「あ、やっぱ俺の負け扱い？鴻矢から聞いたけど……壬月さんに吹つ飛ばされたあとは？」

「家臣一同で検討した結果、結菜さまとしては残念ながら、剣丞さんの立場ば認めるという形で決着がつきました」

「へえ……なら俺は晴れて織田家に居候できることになつたわけか」「私にとつては本当に残念ながらね……でも働かざる者食うべからず。衣食住が保証されている以上、それ相応に働いてもらいますからね」

「うん。それはちゃんとやるよ」

俺もただで特権を享受しようなんて考えちゃいない。  
やれることはなんだってやるつもりだ。

「じゃあひよのことはお願いするわ。木下藤吉郎、通称はひよ子。親しい者の間では、ひよって呼ばれているわ。言うまでもないけど鴻矢くんのこと。井伊万千代直政。通称は鴻矢。織田家の客将で自らの希望で殆どの人から鴻矢と呼ばれているわね。あと、彼、女性みたいな見た目だけど男性だから」

え？ 鴻矢って男なの？ いや、でも井伊直政ってそう言えば小柄で童顔だったみたいだから見える……のか？

「いや、流石にわかるでしょう。結菜さま。一度刃を交えましたし……」

「え？ ほんとに男なの？」

「ええ……」

s a i d o u t

※※※

今、僕は剣丞さんの少し後ろをひよさんと並んで歩いている。

「まさか剣丞さんにまで女と思われていたなんて……」

「あはは……でも、しようがないんじやないかな。ほら、鴻矢くんって綺麗だし」

「元服した男性に対して綺麗つてどうなんですか……」

そんな会話をしていると剣丞さんが後ろを振り返りこういった。

「……あのさ、どうしてそんなに後ろを歩いてるの？」

「はい。剣丞さまはお殿様の旦那様ですし、私なんかが並んでしまうと、剣丞さまの『身分に障りますし……』

「身分に障るつてどういうこと？」

「ちなみに、僕は一応護衛ですので剣丞さんの後ろについてるだけでするので気になさらず」

「高貴つて誰が？ それに鴻矢は誰を護衛してるの？」

…………いや、あの、その。

「……いや、ご冗談を。剣丞さんをですよ」

「でも、俺なんて、平々凡々としたタダの人だよ?」

「田楽狭間に降り立ち織田に勝利をもたらした天人、もしくは弥勒菩薩の生まれ変わりだとか、阿弥陀さまの再臨だとか、仏の化身だとか言われたい放題なの知つてますか?」

「知つてるけど、それ、全部嘘だよ。ただの噂。俺は新田剣丞っていう一人の人間でしかない。ひよたちと同じにね。だからそんな風に気を遣つて欲しくないんだけど……ダメかな?」

「で、でも……恐れ多いですよお……」

「まあ、そうですよね。でも、それと護衛をするしないは話が別なので」

「鴻矢くん!」

「いや、だつて本当に天人だと仏の化身なら壬月さんに簡単に吹き飛ばされて氣を失うなんてことないでしょ?」

僕は僕なりの考えをひよさんに伝える。仏の化身が修羅ならまだしも人間相手に遅れをとるとは考えにくい。それに氣絶するのもです。

「そうそう。それに仏の化身なら鴻矢にも遅れを取つたりしないってば。だから気にしないでくれ。そもそも人として生まれて、身分の違いとかあるはずないんだから」

「で、でもお……」

「それにさ。俺には分からないことだらけなのに、ひよと鴻矢がその調子じや、頼れないじやん」

「頼り、ですか?」

「うんうん。俺、すつげー一人のこと、頼りにしてる。だからさ、身分とかじやなくて、そうだなあ……仲間とか友人として接してくれると嬉しいかな?」

「さすがにそれは……いえ、ありがたいことではあるのですが、剣丞さんを天人云々を抜きにしても織田殿の旦那様ということは変わりないですし、僕達にとつてはお頭であるわけですし……」

「そうです。だから……あの、お頭として、お側近くに仕えてお慕いさせて頂くというのじゃダメですか？」

「そんな風に言つてくれてめちゃくちゃ嬉しいよ。……じゃあこれから、ゆっくり仲良くなつていこう？」

それでいいんですかね。

「はい！あの私、精一杯頑張りますね、お頭！」

まあ、ひよさんはこう言つてますし……

「ふむ……それでは親しみを込めて兄上とお呼びしましようか？」

「うん、いいね……って、なんで兄上？」

「僕の父上は僕が2歳の頃にお亡くなりになられたので一人っ子なんですよ。ですので、弟とか兄とかそういう兄弟関係というのに少し憧れてまして……ダメでしようか？」

「それが鴻矢なりの付き合い方ならそれでいいよ」

「では、今後ともよろしくお願ひします、兄上。僕も僕なりに頑張りますので！」